

に、氏の御研鑽いよいよ重ねられ、遠からぬ将来に刊行されるであろう、第二、第三の論集を大いに期待したい。

(昭51・9 桜楓社刊 A5判 二八八頁 六八〇〇円)

逸見久美著 『評伝 与謝野鉄幹晶子』

武川 忠 一

近代歌人の評伝の中でも、鉄幹・晶子のもは、特に求められていた一つであろう。鉄幹・晶子ともに、近代短歌の開拓者であるというだけでなく、特に鉄幹の場合は、「明星」創刊によって輝やかしい新派和歌の鼓吹者として、だれしもその意義を認めながら、いまだに全集もなく、まだまだ再検討のための資料さえも、だれでも簡単に手にすることが可能というわけではない。晶子の全集も、復刻され補われはしたものの全集としては、さらに加えるべきものが多い。しかし戦後は新間進一氏をはじめ多くの人々によって研究は確実に進められてきた。本書は、それらの文献を丹念に読破し、かつ計り知れぬ努力を要する原資料を、これ以上は不可能と思われるほど丹念に増搜し、まさしく半生を打ちこんだ実証的な方法による積み重ねの成果であり、最初の輝やかなしい鉄幹晶子評伝である。

鉄幹伝、晶子伝をとりあげるにしても、どこかで他をとりあげざるを得なく、とくに鉄幹の伝記研究は、究明のおくれている一つであるといつてよいだろう。『与謝野寛短歌全集』の自作年譜

が、一つの拠りどころではあるが、誤りもあって、多くの問題が残されていた。著者は、さまざまな資料を駆使して、年譜の誤謬を正すが、それは同時に、鉄幹の人間像そのものの、あるいは文学質そのものの客気多い虚実の間にあるものを浮び上らせていくことになっているだけでも、興味を越えた、著者の実証的な方法の成果を見ることができよう。

第一篇与謝野寛、第二篇鳳凰しやう、第三篇鉄幹と晶子の三篇からなり、第一篇は寛の父礼蔵から、母、兄弟から筆を起し、『東西南北』『天地玄黄』の出版までに及ぶ。この部分だけでも、父礼蔵の東奔西走ぶり、行動的な国士的な行動や事業欲などが、鉄幹の資質に重なること、あるいは余り知られていない寛の鹿兒島時代、さらに三回に及ぶ渡韓の事実が、詳しいだけでなく、寛の年譜を訂正しつつ、一、二回目の国士的な行動から、三回目の事業欲への変貌などを浮び上がらせるところなど、資料の処理の特に生き生きとしている部分であろう。名高い、旧派打破の「亡国の夢」にしても、前年の明治二六年「婦女雜誌」の歌論が、丹念に比較され、その形成過程が、さりげなく語られているように、「鉄幹」の号一つでも、その使用は一つひとつ稀覯本を当って確かめるといふ作業を重ねている。

第三篇は、明治三三年以後の、鉄幹晶子の出会いからで、編年体である。これは、両者の作品にも分け入って、同じくその推移と意義に触れながら、おのずから「明星」史の趣を呈するところであり、特に両者の歌風の展開と、両者の心理的なさまさまなからみ合いが詳細をきわめる。編年体であるので、まとまった一歌

集の作の処理が、数年前と重なるところに苦心した叙述を見せるが、これはやむを得ないところだろう。いまはこの膨大な労作の

簡単な説後感にとどめ、後篇の上梓を待つ。

(昭50・4八木書店刊 A5判 七一頁 七、三〇〇円)

新刊紹介

西田正好著

『一休風狂の精神』

一休に関する、著者の最新刊の評論である。本書は、全六章の本文・年譜・あとがきから成るが、本文は、大ざっぱに四つの部分に分つことが出来る。一休説話のいくつかを紹介しながら、その中に、風狂の人一休の生きた時代背景を描き、著者の言う「地獄の季節」が一休に与えた「体験」について触れる、第二章。第三章から第五章までは、大きく一つの流れを形成しており、一休の生涯を、『狂雲集』その他を参照しつつ描出し、一休の破天荒な行動の意味、すなわち著者の言葉を借りれば、「風狂の構造の本質」を、一休の偽悪的な反俗精神と、奔放な恋への情熱とに求めようとする。さらに第六章では、「一休文化圏」の存在を想定し、「一休を、「北山・東山・桃山の三大文化」の「弁証法的な展開を強力に推進させる原動力」であったと結論づけるのである。

なお、第六章、能に関する記述を中心と

して、歴史的事実と相反するような、不可解な所説が多く認められる。

(昭52・5 講談社現代新書477 一九七頁 三九〇円)

川副国基著

『近代文学の評論と作品』

昨年出版された『近代文学の風景』に続いて、昭和42年から51年にかけて発表した13本の論文及び随筆が収められている。

「明治の作家精神」「評論」について

「明治の評論史」「風雲集」について「島村抱月」「この本」「美妙・紅葉の軍記的歴史小説」「舞姫」「黄なる面」の太田豊太郎、「国木田独歩・明治の文体」「島木健作の『昭和二十年日記』」「林美美子の作品」「仮説のすすめと日まじしめ」「近代文学研究界の動向(一九七二年前期)」「近代文学研究の回想」からなる。

明治の作家精神を近代的自我だとし、その自我がどのような形で発露され、確立し、屈折していったかを、時代を背景に明治文学史に沿って語った「明治の作家精神」。明治末期の人格主義を、ますます強圧的となった国家権力によって躍動する自我

が自己の内に屈折していくしかなかったところに生まれたものとし、そこに中世の隠者文学と近代文学との接点を見るなどユニークな視点でわかりやすく語られている。

「島村抱月」においては、抱月の本質が、自然主義の評論を書いていた時においても浪漫的詩人であったことを言及し、「この本」及び「島木健作の『昭和二十年日記』」においては、時戦下における執筆者の苦渋と疑装とを述べて、おそらくは著者にとっても戦時下における日々は重かったに違いないと感じさせる。また「舞姫」はエリスユダヤ人説を打ち出した論文として世評が高いが、その推定過程と論証のあざやかさは、すぐれた推理小説を読むようである。

どの論も、素直に楽しく読みながら、いつのまにか引き込まれてしまう不思議な魅力にあふれている。そして、読み終えた時、文学研究というものがある、こんなにも豊かで瑞々しく幅広いものであったのかと、驚かされるのである。

(昭52・5 早稲田大学出版部刊 四六判 二二八頁 二〇〇〇円)